学校通信　第153号

Hoot

2021年（令和3年）3月1日
学校法人希望が丘学園
鳳凰高等学校
メディカルシステム科
総合福祉科
看護学科基礎課程・専門課程
普通科文理コース
普通科特進コースⅠ類・Ⅱ類

鳳凰スタンプ：植山 愛莉（卒業生）作
題字：書道部

発行：鳳凰高等学校　鹿児島県南さつま市加世田唐仁原1202番地
TEL：0993-53-3633　FAX：0993-52-7974

534名、鳳凰から新たなるステージへ

本日、高等学校第54回卒業式、看護学科専門課程第15回修了式を迎えました。高校生353名、看護学科専門課程生181名、計534名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんはこの学び舎でかけがえのない３年間、５年間を過ごしてきました。新型コロナウイルス感染症の影響で様々な制限があったこの１年を含め、勉強や部活動、諸学校行事などを通し一歩ずつ成長してきました。さまざまなことに一生懸命取り組み努力した日々は、皆さんの糧となることでしょう。これまでの思い出とこれからの希望を胸に、それぞれの道で大きく飛躍されることを願っています。

CLOSE-UP

～ 学業に励み優秀な成績を修めた卒業生に贈られる各賞受賞者を紹介 ～

各賞受賞者

希望が丘学園賞

渡邊　飛鳥
（普通科文理）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
勉強です。大学合格を目指して鳳凰高校に入学したので、その目標を達成するために３年間勉強を頑張りました。

Q２　１番の思い出は？
友だちがたくさんできたことです。休み時間にたくさん話をしたり、勉強を教え合ったりして毎日楽しい高校生活を送ることができました。

Q３　３年間を一言で表すと？
「充実」です。

希望が丘学園賞

本村　真依
（看護学科専門課程）

Q１　専門課程の２年間で最も力を注いだことは？
日々の学習です。国家試験合格のためだけに勉強するのではなく、合格した後に活かせる知識であるように日々の積み重ねを大切にしてきました。「今日は○○の疾患の～まではする」など、毎日具体的に目標を決めて励みました。

Q２　２年間を一言で表すと？
「自他共栄」です。

Q３　後輩たちへ一言。
楽しいことばかりではないと思いますが、全国一の定員を誇る学校であり、周りを見れば仲間がたくさんそばにいます。一人じゃありません。誰かを助けたいと思う、その優しい心を忘れずに頑張っていってください。

鹿児島県知事賞

橋田　翔太
（普通科特進Ⅱ類）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
部活動です。入部当初は上手い方ではなかったので、まずは周りに追いつこうと必死になりました。なるべく遅くまで練習し時間を長く確保し、周りと違うことをしようと心がけていました。また、練習の雰囲気を良くしたり、トレーニング等に積極的に取り組んだり、自分に厳しく努めました。

Q２　１番の思い出は？
テニス部としては２度目の九州大会優勝です。キャプテンとして様々な取組を行ってきましたが、その結果が九州大会優勝という形で返ってきたのでとても嬉しかったです。

Q３　今後の目標は？
大学でもテニスを頑張ります！

私学連合会賞

霜出　なごみ
（普通科特進Ⅰ類）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
たくさんの人と積極的に関わることです。高校生活は３年間と短いので、毎日クラスのみんなとたくさん会話をして冗談を言って、楽しく充実した一日一日を過ごすことに力を注ぎました。

Q２　１番の思い出は？
２年生の遠足です。行事がほとんどなくなってしまった中で、先生方含め28人全員で楽しめた唯一の行事だったからです。

Q３　３年間を一言で表すと？
「一期一会」です。

全国福祉高等学校長会理事長賞

保志　碧泉
（総合福祉科）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
実習と国家試験に向けての勉強です。実習は３年間で４ヶ月以上あり、特に力を注いだことの１つです。２年時の施設実習では、学校だけでは経験できない実践について多く学びました。３年時の実習では、後輩と合同での活動が多く、施設実習での経験などをもとに多くのことを教えられるよう努めました。

Q２　１番の思い出は？
文化祭です。限られた時間の中で、みんなと協力して手話を完成させ発表することができました。

Q３　今後の目標は？
大学で資格取得に向けて努力することです。

産業教育振興中央会賞

野ヶ峯　千夏
（メディカルシステム科）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
検定の取得です。いろいろな検定の取得を目標とすることで、常に学習の意欲を高めることができ、自分の知識の幅も広げることができたと思います。

Q２　１番の思い出は？
休み時間です。何気ない時間ですが、高校生活ももうすぐ終わってしまうのかと思うと、友人たちと過ごした一瞬一瞬がとても大切な思い出だったことに気付きました。

Q３　今後の目標は？
今後もいろいろなことに挑戦し、自分自身をレベルアップさせることです。

産業教育振興中央会賞

井料　舞音
（総合福祉科）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
部活、国家試験に向けての勉強、実習です。卒業まで残り僅かの日々の中で、クラスの仲間とともに国家試験合格に向けて勉強に励んでいます。

Q２　一番の思い出は？
芸術鑑賞会でのＣ＆Ｋのライブです。初めてのライブを仲のいい友人たちと一緒に盛り上がりながら楽しむことができました。

Q３　今後の目標は？
「前向きな人」になることです。

産業教育振興中央会賞

有村　桃
（看護学科基礎課程）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
バレー部に所属していたので、勉強と部活を両立できるように時間を有効に使いました。日々の課題に真剣に取り組み、看護の勉強ではわからないところを自分が理解できるまで先生や周りの友達に聞いて効率よく勉強できるように努めました。

Q２　一番の思い出は？
看護体験発表会です。発表から先輩方の看護に対する強い思いが伝わり、自分の看護観を改めて考えさせられました。

Q３　今後の目標は？
自分の看護観を大事にし、理想とする看護師像に近づくことです。

県産業教育振興会賞

木藤　綾香
（メディカルシステム科）

Q１　１番の思い出は？
先生方やクラスメイトと「フリーマガジンＭマガ」を作成したことです。南さつま市の様々な場所に取材に行き、多くの人が手に取って読みたくなるような魅力的な「Ｍマガ」を作成できたと思っています。

Q２　後輩たちへ一言。
周りのこと一つ一つに感謝し、高校生活を楽しんでください。

Q３　今後の目標は？
社会人として周りから信頼される人材となりたいです。

県産業教育振興会賞

上山　月維
（総合福祉科）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
部活動と実習と国家試験対策です。実習に関しては、例年なら実際に施設で行われますが、コロナの影響で校内実習となりました。いつもとは違う環境の中で、利用者さん、職員さんと互いに役を割り振るなど現場での介護を意識して行い、充実した実習にすることができました。

Q２　１番の思い出は？
介護福祉士国家試験対策です。クラス全員で一つになって協力し、合格率100%を目指し日々の学習に集中して励みました。

Q３　後輩たちへ一言。
将来の自分のために今頑張れ！

県産業教育振興会賞

吉岡　愛華
（看護学科基礎課程）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？
日々の授業です。聞いたこともないような難しい疾患や薬などもありましたが、夢を叶えるため、日々の授業を大切にしてきました。４月からはいよいよ専門課程に入学します。患者さんから頼られる看護師を目指して努力していきたいです。

Q２　一番の思い出は？
花火大会です。コロナ禍で様々なことが規制されるなか、学校側が花火を打ち上げてくれました。気持ちが沈んでいる中、寮の友だちと一緒に見た花火は格別で、勇気をもらえました。生徒を励ましそうとの学校の企画に感謝と感動でいっぱいでした。

Q３　今後の目標は？
国家試験に合格して患者さんから頼られる看護師になることです。

全国看護高等学校長協会賞

永村　優佳
（看護学科専門課程）

Q１　専門課程の２年間で最も力を注いだことは？
勉強です。専門課程に入り、学習内容も一層専門的な内容になりました。毎週のように実施された終講テストにも、国家試験を意識して、計画的にこつこつと取り組んできました。

Q２　２年間を一言で表すと？
５年間の寮生活、学校生活、テスト、実習、国家試験などを乗り越えたという達成感です。

Q３　今後の目標は？
日々成長することです。働き出すと実習では学べなかった新しいことに出会ったり、自分の勉強不足に気付かされたりする中で、いろいろな壁にぶつかると思います。周りの人の支えを借り、刺激をもらいながら、たくさんのことを吸収し、日々成長していきたいと思います。

岩　崎　賞

上竹　龍之介
（普通科文理）

Q１　３年間で最も力を注いだことは？

大学入試に向けた学習、ボランティアや観光甲子園などの課外活動です。

Q２　１番の思い出は？

２年生の時の文化祭です。クラス全員で役割を担って一つの動画を完成させることができ、本番でもたくさんの人に笑ってもらえたことがいい思い出です。

Q３　今後の目標は？

大学で言語を深く学び習得することです。

【各賞推薦基準】

希望が丘学園賞
建学の精神を体し、学業に励み、他の模範となる最優秀な成績を修めた者。

鹿児島県知事賞
令和２年度卒業予定者のうち、学業又はスポーツ・文化活動等に精励し、成績優秀にして他の模範となる者。

私学連合会賞
令和３年３月卒業予定者のうち、在学中よく建学の精神を体し、伝統ある校風のもと学業に励み、他の模範として優秀な成績を修めた者。

全国福祉高等学校長会理事長賞
学業・諸活動・人物のいずれかで優れた成果を修めたもので、学校長の推薦を受けた者。

産業教育振興中央会賞・鹿児島県産業教育振興会賞
農業・工業・商業・水産・家庭・看護・福祉・総合学科等の各学科の生徒で、令和３年３月卒業予定者のうち、学業・人物ともに優秀な者。（普通科は除く）

全国看護高等学校長協会賞
看護に関する学科の生徒で、学業・人物ともに優良で他の模範となった者。

岩崎賞
在学中に勉学に精励し、学業成績優秀にして人格的にも優れ、他の模範となる生徒。

令和２年度　功労賞受賞者

在籍３年間の教育（文化･体育）活動の中で、建学の精神と教育目標を実践し、社会的に称賛され、本校の名声を高め、学校に貢献したと認められた生徒に贈られる。

所属（部）	受賞者名	学科コース	受賞理由
女子サッカー	高　口　小　雪	看護	第31回九州高等学校女子サッカー選手権大会ベスト16
	花　本　きらり	普通科文理	
	山　内　玲　奈	普通科文理	
	溝　江　珠　実	普通科文理	
	河　島　小　桃	普通科特Ⅰ	
	中　丸　美　令	普通科特Ⅰ	
	樋　口　那　帆	普通科特Ⅰ	
	井　上　華　奈	普通科特Ⅱ	
	カーマイケル　愛羅	普通科特Ⅱ	
	西　元　美　羽	普通科特Ⅱ	
	古　田　夕　依	普通科特Ⅱ	
	森　瀬　希　咲	普通科特Ⅱ	

所属（部）	受賞者名	学科コース	受賞理由
男子テニス	山　口　柚　希	普通科特Ⅱ	全日本ジュニアテニス選手権19 個人３位
	原　口　弘　明	普通科特Ⅱ	全国高校総体テニス大会 団体ベスト８
	橋　田　翔　太	普通科特Ⅱ	全国選抜高校テニス大会 九州地区団体優勝
	山　県　希　心	普通科特Ⅱ	
	神　園　凌　志	普通科特Ⅱ	
	中　西　由　飛	普通科特Ⅱ	
女子テニス	藺牟田　　藍	普通科文理	全国選抜高校テニス大会 九州地区団体３位
	佐　藤　　唯	普通科特Ⅱ	
	伊　藤　　凜	普通科特Ⅱ	
	中　村　姫　乃	普通科特Ⅱ	
駅伝	乾　　栞　奈	ＭＳ	全国高等学校陸上競技大会2020 女子5000mW　第７位
	射場山　夢　華	ＭＳ	全九州高等学校駅伝大会 出場権獲得
	伊集院　若　菜	普通科特Ⅰ	

皆勤賞受賞者

【高校３カ年皆勤】

１組	木藤　綾香・中野　颯香
２組	井料　舞音・保志　碧泉
３組	青山昂太郎・禧久　愛里・草薙　楓夏・平中　里香 湯田　百香
４組	川畑　麗翔・濵崎　智葵・村松　陽太・米倉　優白 井本　琴音・沖田ももか・德留　愛華・米満　愛菜
５組	大城　玲羅・松竹　亜依
６組	祝迫　玲奈・大城　紀天・金城ひより・清水　里帆 山脇　陽華
７組	榮野川さやか・大薗　凜・山田　芽依・吉岡　愛華
８組	上迫　果奈・内原　亜美・山内　玲奈・横井　寧々
９組	片平　　楓・下野　　駿
10組	有村　愛翔・田野尻夕映
11組	荻原　大心・神園　凌志・倉野　友樹・小玉　雄大 下田　　樹・野村　健太・橋田　翔太・原口　弘明 松下　堅祐・宮田　　晃・山口　柚希・伊藤　　凜 井上　華奈・佐藤　　唯・森瀬　希咲

【看護学科専門課程２カ年皆勤】

１組	神田　翔太・野村　隼人・青木　和佳・川越　優莉 高峰　　蓮・中村　真那・林田　悠奈・山崎　妃那 米倉　悠華
２組	神谷奈美恵・川平　悠理・小林愛梨花・豊村　　萌 中尾　春華・日髙麻里百・安元　里緒・山下　莉央
３組	内原　麗奈・平　　美奈・田上　花恋・竹之内祐香 山口　萌絵
４組	有川ひより・児玉　一夏・関　　優希・野口　早姫 治澤　由香・水迫優莉音
５組	岡原　帆伽・西屋　乃愛・吉留みはな

【看護学科５カ年皆勤】

４組	味園　京佳
５組	射場山愛華・入江　智花・後藤　友里

鳳凰トピックス

受験生全員合格を願い「合格祈願祭」

１月下旬、各種試験の合格祈願祭が実施された。看護学科専門課程２年生は看護師国家試験に、総合福祉科３年生は介護福祉士国家試験に、普通科３年生は大学試験等に向けて日々全力で励んでいる。

生徒のアイデアからうまれた「バイバイ菌シール」

新型コロナウイルスが猛威をふるう中、看護学科でできることはないかと考え、南さつま飛びたて高校生事業の支援をいただき『バイバイ菌シール』を作成した。このシールは人がよく触れる場所に貼り、シールに触れたら手を洗うきっかけを作ることで感染を予防し、自身を守って欲しいという「思いやり」の気持ちから発案された。

このシールを本校と加世田しらうめ幼稚園に設置した。子どもたちは寒い中でも「シールに触ったら手を洗う！」と楽しみながら手を洗っていた。今後は南さつま市内の小学校や幼稚園に設置し感染症予防を啓発していく。

「税に関する高校生の作文」本校生徒が入賞！

国税庁が毎年実施している「税に関する高校生の作文」において、本校生徒が５名入賞した。令和２年12月７日、知覧税務署長様に来校していただき本校校長室で表彰式を行った。受賞者は以下の通りである。

●熊本国税局長賞
崎原　乙葉 さん（看護学科基礎課程２年）
題名：「誰かの幸せの為にできること」

●知覧税務署長賞
谷川　あこ さん（普通科特進Ⅱ類２年）
題名：「熊本地震で学んだ税金」

●川辺地区租税教育推進協議会長賞
永江　仁美 さん（普通科文理３年）
題名：「デジタル課税の導入と日本の将来について」
永田　優心 さん（看護学科基礎課程３年）
題名：「私を支えてくれる税」
高三潴　瑠菜さん（看護学科基礎課程２年）
題名：「税金のありがたさ」

第20回「新聞」感想文コンクール入選！

南日本新聞主催 第20回「新聞」感想文コンクールの審査会が行われ、鹿児島県内の小中高校から寄せられた1498点の作品の中で、稲田愛子さん（普通科文理２年）の感想文が「南日会特別賞」高校生の部１席に選ばれた。この感想文は令和２年11月21日(土)の南日本新聞に掲載されている。

「ウィズコロナ」のコミュニティ

南日会特別賞　高校生の部　１席

鳳凰高２年　稲田愛子さん

二〇二〇年、私が高校生ボランティアとして参加するはずだった鹿児島県は閉鎖され、地域行事はことごとく中止。学校へ通い、友達と過ごす「ごたり前の学校生活」でさえ、あっさり奪っていった新型コロナウイルス感染症。どこへ行くのもマスク着用、「密」を避けるために一定の距離をとる。一年前、誰がこんな状況を予測できていただろうか。

緊急事態宣言が出され、「自粛」を余儀なくされた三月。九州で唯一感染者が出ていないという安心感は次第に「第一号の感染者になってはいけない」という奇妙な緊張感に変化していった。第一号の感染者確認の報道がされるやいなや、ネット上には憶測や中傷が書き込まれた。その後も、感染者確認の情報が流れる度に、誹謗中傷やそれがあったという残念な情報があふれた。患者の命を救うために奔走している医療従事者やその家族に対する心ない差別や中傷があることを知り、将来医療に携わりたいと考えている私は愕然とした。偏体の知れないウイルスへの恐怖は、人々の冷静な判断力を奪ってしまった。

都会から帰省した人への心ない中傷や、県外ナンバーの車への差別など残念なニュースが流れることがあった。私はコロナウイルス感染への誹謗中傷は、都市部よりも「よそ者を嫌う」田舎の方がひどいのだろうと思っていた。そのため、南日本新聞八月二十二日に掲載された「感染者を迎える　与論クラスター発生一カ月　中傷、差別なく出迎え」の記事は、意外な気持ちで読んだ。人口五千人余りの与論島で感染者への誹謗中傷にならなかったのは、結びつきが強く、互いに配慮し気遣う土壌があったことと、ラインで感染者の名前など情報を正しく共有したことで正しく恐れサポートするムードが生まれたからではないかと思われた。私は、この記事を読んで与論島のコミュニティを醸成した歴史的な風土と、地域コミュニティについて調べてみようと考えた。

十七世紀に島津藩の支配下となってから、サトウキビの年貢による過酷な搾取に苦しめられた与論島は、明治になると鉄鉱石の採掘場となった。戦後はアメリカの統治下、一九五三年に奄美群島が日本に返還されると、沖縄に働きに出ていた人々は「日本人」としてアメリカからの差別を受けたという。これらの苦難と差別を乗り越えるために、互いに助け合う相互扶助の精神風土ができあがったのだろう。結いの精神を大切にしている奄美群島には「水は山のかげ、人は世間のかげ」という格言があるそうだ。水は、山の木々のおかげで蓄えられ、木々があるのは水のおかげであるように、人も周りの人々の助けや支えがあってこそ暮らしができるものだ。感謝の気持ちを忘れずに人の役に立ちたいという意味である。人と人とのつながりを大切にしてきた与論島だったから、新型コロナウイルスに感染し、島外で結婚して戻ってきた人に「おかえりなさい、元気になってよかったね」という声をかけられるコミュニティが存在できたのだろうと思った。

アメリカの社会学者マキヴァーは、コミュニティを「一定の地域のうえに展開される自生的な共同生活」と定義している。広辞苑によると、コミュニティとは、「一定の地域に居住し、共属感情を持つ人々の集団」である。日本語では地域共同体という意味で使われることがない。ただ同じ地域に居住しているからといって、そこに人と人の心のつながりがなければコミュニティとは言えないと私は考えている。私が種子島で過ごした三年間、地域行事や子供会でのつながりが強く、大人たちがよく声をかけてくれていた。集落の中で生活しているのだという実感があった。小学生なりにコミュニティの中にいる自分を自覚できていたように思う。今年は、友達と一緒にゆっくり過ごすことができにくくなった。私の心を豊かにしてくれる文化・芸術は感染拡大予防のため真っ先に活動を制限されてしまった。このコロナ禍で、人々は直接人とつながることができ、かなりの精神的なダメージを受けた。ただでさえ希薄になりがちだったコミュニティは、つながる手段を失ったことで分断してしまったのではないだろうか。

今、日本は新しい生活様式と共に「ウィズコロナ」の時代に入った。これから先、コロナウイルス感染以上に恐ろしい災難が襲ってこないとは限らない。こういう世の中だからこそ人と人とのつながりを大切にして、互いの理解を深めておかなければならないと思う。与論島の人々が、互いに配慮し気遣う姿を見せてくれたように、真のコミュニティを形成する新しい方法を探っていきたいと考える。

▲南日本新聞令和２年11月21日掲載記事